

時事新報

明治十八年八月八日（土曜日）

日出午前五時十四分
入午後二時四十六分
出入午前二時四十五分
午後四時四十五分

日ハ全國農工商業ノ景氣モ回復シ而南門ノ鐵道モ堅固
増シ或ハ永ク日本國ノ獨立富強ヲ維持増進スルノ望
達セラル、ナラン是非入用ノ鐵道ヲ布設シテ一ハ不

氣ナ退治シ一ノ國ノ防禦ナ歟ヨス所謂一舉兩得ナル
ノニアモアランカ何卒讀者諸君ノ一考ナ煩ハシ近日
シテ九州及セ山陽道銀道ノ成就ヲ見ルコナ得ハ誠ニ

官報

任工兵中佐	任工兵少佐	从六位四等
○明治十八年六月廿二日	任工兵少佐	从六位四等
任工兵中佐	任工兵中佐	从六位四等
任工兵中佐	任工兵中佐	从六位四等
任工兵中佐	任工兵中佐	从六位四等

○明治十八年六月廿九日
任歩兵少佐歩兵大尉
正七位勳四等
鈴田宣山田直黒岩直
全正七位勳四等
全正七位勳四等
全正七位勳四等

○聖母御待受 八月四日大坂發の報道に御還幸の途
　　雜　　報

臨時聖潔と枉させ給ふ付ての造幣局泉布館を以て在所より定めらるゝ筈にて館内及庭前等の修繕中なりも同館はよの程の水害にて破損せし所なるが爲めな

と又駆駐籠中の大坂砲兵工廠の海岸砲鑄造とも天皇供せんと目下準備中なり又大坂銅錢にても練兵と天皇供するに付てハ先般河内地方水害の節一時寮屋と

失せし貧困者一同は大坂府より同臺へ黒崎の上城屋兵庫の南隅一萬餘坪と四十日間の日限にて借受け之救助小屋を建設して罹害者を入れ置きありしが右越の際甚陥あると以て未だ日限以内あるも本日限より

屋と取扱ひ家屋の存在せる者ハ夫々自家へ送り歸し
他は造営局附屬の京塵へ一時立退しむる者なりとあ
然るゝ昨日の電報よ在る如く塵上の御立寄風聞の事

て北白川宮ダ御名代に邊かるゝ事となりるものあら
○日耳曼老帝 ウヰルヘルム陛下(本年八十八)が先
不運なりし由は既に紙上にも記載せしが今伯林より

近報ふ據るに開帝の御氣はその後次第に平急に赴き
は健全の容体にて去る六月の六日より久々より軍帽
腹を召し皇女バアブア大歎主と眞に馬車にて宮殿と

○井戸外齋藤 去る三日の初東京と重して箱根宮ノ温泉場へ赴きたる井戸外齋藤には一昨夜歸京したりで市街電車と通じたりと云へり

し井上夫人には相巣々を宮ノ下に避暑し居るよし
○在慶七年在慶五年 本年四月の一日至徳島の
宰相ビスマルク公爵の第七十年祭なる付と御焼

帝と始末として内外宮親は人々より種々の贈物又比
較等ありて當時その風習の盛大なりし次第は時事新
報上より登載せし處あるが貴は去六月の四日ハ公が
詔を出で、よも「丁度は手が當る事間もなくて才公の

遂に出て、いよいよ五年が経て十年算するに至り、何事の
様若くと知已の人々を嘗て公の邸に參して賀辭と陳
たる由なり尤も去る四月公が七十高齢の時に既に疎
を誤りたるに付き此後の況みせ取る格式かなし人臣

よりの贈物も無か奉」とのこと

着せり又該會議ハ本日十一日頃第一回と開く都合な
と同氏より其席へ電報到達したるよし

角二千萬ノ金ナ嘉樂ノ年七分以上ノ利足ナ拂ヒ居ナガ
ラ空シコレナ庫中ニ埋没セシメテ氣長ク既除鐵橋等
ノ工事ノ成ルヲ待ナ居ルハ未ダ十分ニ智者ノ事ト云ア
ベカラズ則ナ豆シノ今ノ好機會ニ乘シテ此中仙道鐵道
開業金ナ他ノ鐵道鐵路ニ況用シ現地ノ成分唯利益ノ多
カクソコナ免ムベキナリ人情バ日ハソ此二千萬ノ金ヘ
中仙道鐵道及貢ナルモノナ賣リタル金ニシテ只一枚銀
道公債ナルモノナ賣リテ得タル金ニアラズ中仙道鐵道
ニ使用スルカナフア借入レタル金ナ他ノ鐵ナキ鐵路等
使用シテハ政府が人ナ詐クノ威アリテヨロシカナズト
然レニヨハ監ク窮屈ナル考ニシテ日本國ノ實訓ナ願ニ

李事家